

ボキッ。

これは何の音だ？三日前にやつとのれるようになった自てん車がたおれた音かと思つたら、なんと、ぼくの足のほねがおれた音だった。ぼくは、「いたいよ、いたいよ。おれたかもしれない。」と、なきながらうったえたのに、そばで見えていたおとうさんは、「ばかか。」と一言言つてわらつていただけだった。自てん車にのれるようになったかっこいいすがたを見せて、ほめてもらはず

だったのに…。

夜になって、ぼくの足はどんどんはれていった。足の太さは二倍になった。ぼくは、いたくて朝までぜんぜんねむれなかった。

次の日、レントゲンしゃしんを見て、びょういんの先生もかんごしさんも、

「ほね、おれてるね。」と言つた。だからあれほと言つたのに。ぼくは、十五時間もほつたらか

しにされたのだ。ほうたいをまかれたぼくの足は、サイボーグみたいにカッチカチになった。こうして、ぼくのこっせつ生かつがはじまつた。

トイレに行く時は、おかあさんがだっこしてつれていってくれた。おふろの時が大へんで、おとうさんがぼくの足に「もえるゴミ」用のふくろをかぶせて、水が入らないようにひもでむすんで入れてくれた。使つていないストーブにすわつてパンツをはいた。おとうさんが、「るい、頭いいな。」と、ほめてくれた。ほんとは、自てん車をほめてほしかったのに…。

一週間休んで、いよいよ学校に行くことになった。はじめての車いす登校できんちようしたけど、今までにないくらい友だちがぼくのせわをしてくれた。なれない車いすをおしてくれたり、げんかんまでランドセルをはこんでくれたり、教か書をしまつてくれたりした。休み時間も、かならずだれかがぼくのそばにいてくれた。先生たちもすごくやさしくて、そうじのできないぼくのため

に、車いすにとりつけられるモップマシーンをつくってくれた。ぼくは、ほんの少しだけ、「こっせつもわるくないなあ。」と思つた。

七月。だんだん暑くなつてきて、ギブスの中がかゆくなつてきた。ぼくは、かゆくてかゆくて頭がおかしくなりそうだった。おかあさんが使う、りょうりのはしで足がかけるかためしてみたけど、どれもみじかくてだめだった。「おかあさん、何かいいのない？」「これはどう？」おかあさんは「あみぼう」をかしてくれた。かゆいところにあと少しとどかなかつたけれど、ぼくは、

ねな

がらギブスのおくまでつっこんでかいた。

そのころ、ぼくの家ではアリが大はつせいしていた。おばあちゃんもおかあさんも、アリスプレーをもって「アリ！アリ！」とさけんていた。そのうち、なんとそのアリが、ぼくのギブスの中にも入つてしまったのだ。「わあ、るいの足の中にアリがいるよー。」と助けをもとめても、「マジで？うそでしょ。」とわらうだけで、だれもしんじてくれない。

たんにんのあべ先生なんて、「じゃあ、るいのギブスのそばにさとうをおいてたしかめてみよう。」とおもしろがつて、テープにさとうをのせて、ぼくのふとももにくつつけたりしてさ。みんなはわらうけど、ぼくの足の中にはぜつたいアリがいた。アリが一れつにならんで、ぼくの足の中にすをつくろうとしているにちがいない。ぼくは、「アリにぼくの足を家にされたらどうしよう。」と、毎日しんばいでたまらなかつた。そのくらい、ぼくのギブスの中はもぞもぞしていた。

このままでは、アリにギブスの中をせんりようされてしまふと思ひ、ぼくは、家に帰つてから

も足の上にさとうをおいて、アリが出てくるのをずっとまっていた。すると、「ギブスの中にさとうが入ったらどうするの。」と、おかあさんにこっぴどくしかられた。

ギブス生かつにもすっかりなれて、家の中では車いすなしでうごけるようになったころ、ついにギブスとおさらばする時がやってきた。

びょういんの先生が、バリカンくらしいの大ききの、草かりきを小さくしたみたいなきかいをもつてきて、ぼくのギブスを切った。切っている間、ブルブルがぼくの足にも伝わってきて、ぼくは、「足、切られちゃう。」と、目をつぶっていた。

ギブスをあけてみると、小さいたまごが一つあった。「先生、見て！たまごがあるよ。ぜったいアリのたまごだ。」先生やかんごしさんもびっくりした顔でのぞきこんだ。ほらね、やっぱりアリたちは、ギブスの中にすをつくるつもりだったんだ。ふう、あぶないところだった。

こっせつした足は、すごく細くなっていた。こするとアカがぼろぼろおちてきた。

こうして、ぼくのつらくてたのしいギブス生かつはおわったのだ。  
(もつとつらいリハビリ生かつにつづく！)